
当報告の内容は、それぞれの著者の著作物です。

Copyrighted materials of the authors.

共同利用・共同研究課題「接続する海としての地中海」第二回会議報告

文責 篠田知暁

2023年3月20日日本時間16時より、共同利用・共同研究課題「接続する海としての地中海」2022年度第2回研究会を開催した。研究会はベイルートのJaCMESとオンラインのハイブリッドで開催された。参加者は、共同研究者ではFelix Arnold (German Archeological Institute Madrid)、Georg Christ (University of Manchester)、押尾高志 (西南学院大学)、熊倉和歌子 (東京外国語大学)、黒木英充 (東京外国語大学)、深見奈緒子 (日本学術振興会カイロ研究連絡センター)、篠田知暁 (東京外国語大学) である。また、ゲストスピーカーとして末森晴賀 (北海道大学)、オブザーバーとして Enass Khansa (American University of Beirut) が参加した。

報告者と報告タイトルは以下の通り。

Felix ARNOLD, “Domed audience halls across the Mediterranean in the 14th century CE”

Tomoaki SHINODA “Muslims or Christians? Learning agnosticism in Saadian Marrakesh”

Georg CHRIST “A Transmediterranean Network? Multilayered statehood and trade connectivity in the Mediterranean and Red Sea”

Haruka SUEMORI “Ottoman-Venetian Maritime Regime on Piracy in the Early Modern Mediterranean”

Arnold 報告は、14世紀のカイロ、グラナダ、そしてカスティーリャ王国支配下のセビーリャという三つの都市について、ドーム型謁見室を中心としたプランを持つ建築を比較し、その共通性と相違を分析した。

Shinoda 報告は、16世紀マラケシュで起きた殉教事件を、その中心人物となったヨーロッパ出身の元キリスト教徒改宗者やその子供たちの、政治的帰属と宗教的アイデンティティの乖離という観点から読み解いた研究である。

Christ 報告は、東アジアから地中海地域まで伸びる商業ネットワークがどのようにして機能していたのかという大きな問題について、ネットワークの働きを帝国・国家・都市・共同体・商人という五段階の階層構造で捉えることの重要性を、特にカイロのマムルーク朝を中心に指摘した。

Suemori 報告は、初期近世におけるオスマン朝の海上保安体制について、特にヴェネツィアとの外交関係史料を中心に分析した。そして、海上での海賊の取り締まりが、従来は国内の治安対策と同様に行われていたのに対して、カルロヴィッツ条約以降はヨーロッパの影響を受けて変化したと論じた。

以上の研究から、中世から近世の地中海における人やモノ、知識のネットワークの機能と、それを可能にする政治的秩序の一端が明らかにされた。

最後に、次回ワークショップの時期（2024年3月）を決定し、解散した。